

教養科目「社会」の挑戦

横 家 純 一

1. はじめに

大学の一般教養として位置づけられたさい、社会学は、いつのまにか、「社会」という名称に置き換えられた。「学」が取れただけの変更で、たいしたことはないように思われるかもしれない。だが、この一字が、正式になくなったことで、担当教員は、意外にも、心構えをおおきく変更せざるをえなくなった。つまり、教材の選定から、講義内容にいたるまで、「学」に頼らない言葉選びをするはめになったのである。

本稿では、そのような適応過程の一端をふりかえることで、「社会」の可能性と限界について考えてみようとおもう。まず最初に、出版社が提供する教科書リストを一覧することで、社会的トピックスのひろがりについて考えてみる。たまたま手元にあるミネルヴァ書房のリストには、通常、連辞符社会学と称されるものとして、家族社会学、福祉社会学、国際社会学、都市社会学、医療社会学、環境社会学、文化社会学、宗教社会学などがある。それとともに、ジレンマの社会学、はじまりの社会学、ポップカルチャーで学ぶ社会学入門、よくわかるジェンダー・スタディーズ、よくわかるメディア・スタディーズなどの専門分野にやや特化したものもある。とはいえ、社会学からすれば、これらはみな入門的テキストであり、「社会」の授業で用いることは可能である。

つぎに、実際に、筆者の授業で扱ったものとして、「世界社会論」というものがある。先にあげた連辞符社会学でいえば、「国際社会学」である。世界だろうと、国際だろうと、対象としているものは同じだが、その分析視角は異なる。「世界社会論」といった切り口をつかえば、どうしても、「従属理論」を引用せざるをえないのにたいし、「国際社会学」の方は、そのような視点に重点が置かれることは、まずない。どちらを採用するかは、担当者に任されるが、教養科目の内容としてその両方について述べる時間的ゆとりはない。「世界社会論」の路線でいけば、世界システム論やウォーラーステインについてまで言及せざるをえないからである。

2. 産業化

現代社会の変動において最大のウェイトをしめるのは、なんといっても、産業化であり、それにつづく工業化、情報化、そして、消費社会化であろう。さらに、話題として合理化や

民主化をあげてもよいだろう。ここにおけるテキストとしては、見田宗介の一連の書物が、広範な分野を網羅しているだけでなく、経年的変化についてのきめこまかい見識まで提供していることから、使いやすい。

『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—』（岩波新書 1996）では、従来の「大量生産→大量消費」から「大量採取→大量生産→大量消費→大量廃棄」の視点までを提供し、その絶滅模様を、レイチェル・カーソンの「沈黙の春 1962」や石牟礼道子の「苦界浄土 1969」を引用することで検証し、「ダブル・スタンダード」の概念でもって、有害な薬品の生産で潤う日本企業の矛盾——「輸出に限るという限定をつければ、どんな農薬の生産も輸出も」——をすどく指摘する。さらに、「ブーメラン現象」という概念をバナナ貿易の実態解明に援用し、「ゆたかな消費社会は、農薬を自分の身体に回収している」とまでいう。『社会学入門—人間と社会の未来』（岩波新書 2006）では、「連合体、交響体、共同体、周列体」という社会存立の4つの理念型を構想し、前著で示した危機意識を、あたかもやわらげようとしているかのようなのである。たとえば、「外食の 寒きテーブルに 話途絶え 文庫本読めば 妻は泣きだす」といった作品に、一方では、人間関係の不確かさや希薄化を明記しつつ、もう一方では、その詩的言語の可能性に期待しているといえなくもない。

『現代社会はどこに向かうか—高原の見晴らしを切り開くこと』（岩波新書 2018）では、見かけ、デザイン、広告などによる情報化の手法は、市場を無限化することには成功したが、同時に、CO₂を含む環境廃棄物の無限の排出を帰結するシステムであること、したがって、「資源消費量＝環境破壊量」というおそろべき等式を指摘している。この中で1点を取り上げるとすると、産業化というものが大量生産→大量廃棄というプロセスをもっていて、人間社会の未来に暗雲を投げかけていること、しかしながら、人間の営為はそれをクリアするスベをもっているはず、という言説は、一部の人に、「信仰告白」と映ったように、どこにも未来社会のヴィジョンがない「社会」の企画としてはむなしいし、大学の「教養科目」としては存立しないだろう。

産業化について忘れてはならない視点のひとつは、市場原理主義である。ましこ・ひでのりの『社会学のまなざし』（三元社 2012）は、資本家のイデオログとして、ミルトン・フリードマン [1912-2006] を引用する。

企業の利害とは株主の利害です。…株主の金を使って、社会にとっては良いが収益には直結しないことに手を初めるべきでしょうか？ 私はノーだと思います。…偽善が収益に寄与するのであればそれも良し、道徳的善意も収益につながらないのであれば非道徳。

ましこ・ひでのりはこれを、「ありとあらゆる手段をつくして投資家以外の「社会」全体から収奪すること」と読みかえる。これは、市場が必要とするなら核兵器も OK、という見解に到達しよう。と同時に、この文脈で、日本企業の開祖ともいえる松下幸之助 [1894-1989]

の水道哲学も引用する。

産業人の使命は貧乏の克服である。その為には、物資の生産に次ぐ生産を以って、富を増大しなければならない。…産業人の使命も、水道の水の如く、物資を無尽蔵たらしめ、無代に等しい価格で提供する事にある。

産業化についての見田宗介の警告をみてきたわれわれには、ミルトン・フリードマンや松下幸之助の「哲学」は、現代においても、市場原理主義の正当性をいかに擁護しているとみえるだけに、その先にまちかまえている社会の不確かさについての思考をストップさせてはならないだろう。

3. 雇用

経営者の視点ではなく、働く者のそれで雇用を考察した中野麻美は、『労働ダンピング—雇用の多様化の果てに』（岩波新書 2006）において、たとえば、派遣労働の矛盾として、「ひとりランチ」というものがある、という。これは、同じ職場で働く正社員が派遣社員に向かって、「仕事なんか教えようものなら、あの人に仕事を取られる」といった事例と同類である。「社会」においては、賃金格差の説明はむづかしいが、これらの事例には、多くの学生がショックを受ける。自らのアルバイト経験がその状況の理解を深めるからかもしれない。だが、問題はここからだ。現代社会の労働問題を十分説明するためには、もう少し別の文献が必要であろう。

そこで、登場するのが森岡孝二の『就職とは何か—〈まともな働き方〉の条件』（岩波新書 2011）と『雇用身分社会』（岩波新書 2015）だ。森岡孝二は、日本社会の雇用について、「まともな働き方」というキーワードにより、理解を深めようとしている。「労働」といってもいいわけだが、それでは、雇用主との対立軸のほうが強調されてしまうからだろうか。「職場」という言葉に、人びとの大切な生活環境のひとつであることを意識しつつ、「まともな」という形容詞を重ねることで、そうでない労働環境に置かれた人びとへのあたたかい思いを増幅しているのだ。

たとえば、経営者によるいやがらせともいえる「自分史のすすめ」——これはあとから取り上げる自己啓発とは、いわば逆ベクトルの思考法だが——などは、雇用主側の自己利益の追求が、働く人の精神を、そしてその生活を破壊していくさまをありありと見せてくれる。ただし、実際に授業で導入した時には、そのような職場体験に乏しい学生にとっては、わずかなインパクトしかなかったことを明記しておく。過労死、「ああ野麦峠」、「女工哀史」を話題として引用した、ややショッキングな「身分社会」の警告についても、そうであったし、やや身近な話題であるはずの、女性の身分別未婚率の紹介（正規：57%、非正規：38%）においても、あまりいい反応は生まれなかった。今ここで考えられることは、導入の仕方が、

スマホ時代に対応できていなかったのかもしれない。つまり、それらは、どこかですでにデータとしてしまい込まれていて、何も考えなくても、アクセスすれば手に取ることができる、きわめて安易で淡白な情報に変形されているのかもしれない。

4. 教育

片瀬一男は、『ライフ・イベントの社会学』（世界思想社 2013）において、映画ハリー・ポッターの始まりのシーンである、ふくろうたちの登場と、イギリス社会の入学制度を並べて論じることで、属性主義と能力主義が現代社会にもすくなく影響をあたえていることを説いた。こんな具合にはじまる。

親愛なるポッター殿

このたびhogwarts魔法魔術学校にめでたく入学を許可されたましたこと、心より
お喜び申し上げます。—— 新学期は9月1日に始まります。7月31日必着でふ
くろう便にてのお返事をお待ちしております。 副校長ミネルバ・マクゴナガル

このうえで、「入試を受けていないのに、なぜ入学許可証が届くの」という質問をもちだす。答えは、「上流階級の親が、男の子が生まれると、誕生日の翌日に寄宿舎のハウス・マスター宛に手紙を書いて登録しておく。13歳の誕生日に、その寄宿舎から呼び出し状が来て、面接とテストを受ける」である。これを導入として、さらに、個人の能力や努力によって変えられない出自・属性に基づく生得的地位（ascribed status）と、個人の能力と努力の結果である業績に基づいて配分される獲得的地位（achieved status）という重要概念を提示し、前者から後者への移行が近代化であることを理解してもらうことになっている。ただし、今どきの学生のハリー・ポッター経験はうすい。

筆者による具体的な授業展開としては、このふたつの概念を導入した後、それぞれの個人の体験の中から事例をひろってもらうことにした。そこででてきたのが、つぎのような回答である。

- ① 属性主義：生まれ、親、遺産、遺伝子、血、契約、偉大な親、運命、魔法族、校長がデータ管理、家系、住んでる場所、戸籍、優遇、裏口、選ばれた、上流階級、育ち。
- ② 業績主義：才能、素質、センス、権力、能力（マグルの中で生き延びた）、行い（蛇との会話）、要素、みんなの希望、ふくろうセンサー。
- ③ その他：ヴォルデモートを倒す使命、校長に頼んだ（コネ入学）、招待状には魔法が（マグルには止められない）、叔母の家での生活が試験だった、あれは受験票だった、救世主、人手不足、スポ推。

これらをみていると、意外にも、「社会」における属性主義と業績主義の概念がめざす認識のすべてを網羅していることがわかる。これをうけて、筆者はさらにつぎのような「謎解き」を展開する。

- ① そんな不平等（マグル＝非貴族にとって）が、どうして許されるのか。
- ② 魔法族にも貴族と庶民があるのでは。
- ③ 映画で表現しただけで、現実社会の反映ではないのに、どうしてそれが受けるのか。

ひとつの映像表現は、このような可能性を秘めているからこそ大事にしなければならない。しかし、これらの謎をめぐる展開は、残念ながら、時間的にも内容的にもいまひとつの出来に終わってしまった。

他方、片瀬一男の展開は、イギリスのパブリック・スクールという、上流階級のエリート私立進学校（イートン、ラグビー、ウェストミンスター、ウィンチェスター）で採用されている「高校の学習到達度を測るAレベルのテスト」（General Certificate of Education Advanced Level）の一例をもちだす。たとえば、「社会統制の機関は、法律がそうであるように、成功した利害集団（＝エリート）の思惑を強化するだけである（中略）」という主張について論じなさい、というものである。「社会統制」とか「利害集団」といったややむづかしい用語を使っていて、誰もが納得できるわけではないと思っていたところ、意外にも、学生たちの答えのなかには、つぎのような秀逸なものがでてきた。いずれの回答も、正解と認定できるほどの認識の深さを示している。

- ① 社会をどのようなものにするかを考えることのできる人間は、日々の生活に余裕のある、成功した人間、成功した人は自信がつく。
- ② 指導者に反発すると殺されるから従うしかない、などと思わせてしまうなんて、許せない。
- ③ 成功した利害集団＝有名企業に内定をもらった人、に合わせようと序列社会。
- ④ 子供が学校で成功だけ教えられれば、失敗した時の対応の仕方がわからなく。
- ⑤ 力のない人の意見を聞いてもらえない。

こうなると筆者の方も、やや「悪ノリ」感覚で、①支配層が、みずからの手の内をさらけ出している訳は、②弱者の代弁者はどこに、③エリート校の人材は体制派の思惑を批判できるものでなければならない、と急展開する。こうして、片瀬一男の教育についての考察は、イギリス経由で、日本の状況分析にいたる。簡単にいえば、かつての「エリート（専門知識の伝達）」の段階から、「マス教育」をへて、いまや「ユニバーサル（新しい経験の共有）」のそれに移行しているのである。ただし筆者は、第三のユニバーサル段階には、「産業社会に適応する国民・消費者の養成を目指すもの」という留保をつけておきたい。ここでは、段

階的なものから場当たりの、さらに、フレキシブルなものへの変遷が「カリキュラムの多様化」とされ、おなじく、能力主義（試験、記憶中心）から属性主義（面接、推薦、AO）への移行が「選抜の多様化」ともはやされるのである。こうして醸成されてくる「学生の多様化」について、片瀬一男は、「学生は単位への関心は高いが、学知獲得への動機付けが弱い」と断言する。こうなるとは、「社会」をつうじて、「単位取得のみを目指す学生に、教員はどう対応したらいいのか」という嘆きを、「教養を身につけることは楽しい(♫'ω')♫」というオプティミズムに置きかえることは容易ではない。できることなら、「学ぶことを欲望するものしか学ぶことができない」（内田樹『先生はえらい』筑摩書房 2005）と開きなおってみたい。

ところがあるとき、「出自・属性・身分・家柄・業績・能力・獲得・努力などを用いて、これまで受けてきた自分の教育・学校体験を振り返ってみましょう」という課題をだした。するとつぎのような答えが返ってきた。

- ① 父から「名の知れた学校じゃないと絶対だめ」、② ごく普通の一般家庭
- ③ 担任から「**がっているからそっちにしたら」、④ 周りはスポ推
- ⑤ 両親から「新しいことにはチャレンジを」、⑥ 塾に通わせてもらい
- ⑦ 塾に通い、「自称進学校」に入学、⑧ 高校では「全員一般入試を」
- ⑨ 高校は「能力別英語のクラス」、⑩ 性別で先生の接し方が異なる

ここでは、「社会」があつかう、教育についての限界と可能性がみてとれる。つまり、学生は、自分ひとりで生きてきたわけではなく、周りの人から影響をうけてきていること、そして、これからもそうあるしかないこと、よほどの覚悟がない限り、そのような所与の条件から自由になることはできないこと、である。にもかかわらず、ここでは同時に、いま現在の自分が、4～5年前の自分を思いだし、とりわけ学校をめぐる立ち居振る舞いや先生をふくめたまわりのプレイヤーたちのことを思いだし、自分が主人公としての物語りを創りだしてみる。そうすると、当時の、そして今も引き続けている教育体験を、本当の意味で、点検、または再点検できる。抽象的な制度としての教育が、実際のプレイヤーたちを迎えて、よみがえるのである。抽象的な概念をもちいて社会とはなにかを考える必要はなく、次から次へと、当時の自分では整理できない数々のシーンが、いわば「名場面」として生まれてくるだろう。こうして、「自分の教育体験を振り返ってみよう」という自分史的試みは、そんな「社会」の限界を飛び越える契機になっているといえよう。

5. 世界社会

通常の世界社会論では、長谷川公一ほかの『社会学』（ミネルヴァ書房 2007）のように、集団の名前、共通の血統神話、歴史・文化の共有、聖地、連帯感を強調する「歴史主義の

考え方」と、ウォーラーステインの「●●の低開発のおかげで■■は発展した」という発想のような「近代主義的見方」のふたつを論ずることが多い。ここでは、どちらかといえば、後者に属する見方を取り上げる。ナオミ・クラインの『新版ブランドなんか、いらない NO LOGO』（大月書店 2009）とニューヨーク・タイムズの記事である。ただ、多国籍企業が世界をまたにかけて、利益を追求していることの指摘そのものは、学生たちにとってあまりピンとこない。そこで登場するのが、ディズニーの話題である。

ディズニーのCEOマイケル・アイズナーは1時間に9783ドル稼ぎ、ハイチの労働者は1時間に28セントしか稼げない…ディズニーの「101匹わんちゃん」のパジャマをつくるハイチの労働者の住む小屋と、その「犬たち」が住む豪華マンションを比べる。犬は、ふかふかベッドに、オシャレな内装の豪華マンションに住み…一方、ハイチの労働者は、マラリアと赤痢が蔓延する小屋に…。

これを示された学生たちは、つぎのような反応をあらわす。①ハイチの労働者もディズニーのCEOになる可能性はゼロではない。世界は不平等だから保っている、②私たちが着ている服をつくるために、とても安い賃金で働いている人がある。その服は日本ではファストファッションとして安く売られている。とても悲しい現実である、③その生活から「逃げる」という選択はできないものか、④この差を私は不平等とは思わない。努力や実力の差と考え、⑤アイズナーはすばらしいものを自らの創造力で生み出している、⑥最低限の衛生的な場所を雇用主側が提供すべき、⑦ディズニーは夢の世界が作られているけれどやはり見えないところの労働環境では人間の汚い部分がある、⑧これが不当なのかは分からない、⑨不衛生な所で生活させるのは人権を大切にしていない、⑩事実を知るのみで何もできないことに嫌気がさし、現実から目を背けたくなくなってしまう、⑪報道の仕方はあまりに演说的である、⑫この現実を誰もが知っておくべき、⑬仕方がないことだ。

ナオミ・クラインの警告を真摯に受け止めているもの（②、⑥、⑦、⑨など）から、現状肯定的なあきらめ（④、⑧、⑬など）を表明しているものまで多種多様であるが、こうしてようやく学生たちは、世界社会の仕組みの一端をかいまみることができるようになる。ただ、企業ロゴを逆手にとった社会運動についてまで理解が及ぶことはない。ここで、教員からの挑発は、「世界社会とは言え、どうして、遠いカリブ海のハイチの住民のことを心配しないかんの」となる。その答えとして、「ハイチの労働者は、生活のためにパジャマを作る。そのパジャマを着た犬の映画を、われわれは娯楽としてみる。このとき、持たざる者と持つ者の格差が顕在化する。このことに疑問をもつことで、「われわれの世界認識は、より深まる」とかっこよく言いたいところだが、はたしてどの程度の知的認識をもたらしているのかは、さだかではない。

こうして登場するのが、ニューヨーク・タイムズである。ガーナ、メキシコ、コロンビアなどの現地報告が、英語のままではあるが、学生たちの心に、いずれ、しみこんでいくはず

である。世界は調和のとれた「国際社会」ではないこと、むしろ、西澤晃彦『社会学をつかむ』（有斐閣 2008）のいう、「世界の一方には、持たざる者たちを無視・蔑視する持つ者たちがおり、もう一方には、持つ者への憎悪の心情を潜在的・顕在的に抱く持たざる者たちがいる」、そして、そのひとつの帰結が、テロリストたちが暗躍する、緊張感のある葛藤・闘争状態であること、の理解にまで到達するであろう。たとえば、ポール・グリーングラス監督の「UNITED93」（2006）は、その映像表現に力をかりて、2001年9月11日のハイジャックを、繁栄するアメリカと祈るテロリスト—西澤晃彦のいう、「持つ者たちと持たざる者たち」—の相克といった形で描き、いずれ、学生たちの心に訴えかけるときがくるであろう。

もうひとつ、ニューヨーク・タイムズを引用する。ガーナで取材する Dionne Searcey と Matt Richtel の記事「When KFC came to Ghana (NYT2017年10月5日)」である。一部日本語訳（●の箇所）におきかえた、ちょっと長めの原文を引用する。

Chief among the corporate players is KFC, and its American parent company, Yum Brands, which has muscled northward from South Africa --- where KFC has about 850 outlets and a powerful brand name --- throughout sub-Saharan Africa: to Angola, Tanzania, Nigeria, Uganda, Kenya, Ghana and beyond.

●経済成長にともない、アフリカには KFC をはじめとするファーストフード企業が進出する。

But KFC's expansions here come as obesity and related health problems have been surging. Public health officials see fried chicken, french fries and pizza as spurring and intensifying a global obesity epidemic that has hit hard in Ghana.

●ところが、肥満の問題が出てくる。ガーナ人の肥満率は、人口の2%から13.6%に増大。にもかかわらず、KFC のスポークスマンは、われわれは、バランスの取れた食品を提供しているだけ、と釈明する。

① At KFC, we're proud of our world famous, freshly in-store prepared fried chicken and believe it can be enjoyed as a part of a balanced diet and healthy lifestyle.

② We do believe in a healthy balanced lifestyle.

③ We wouldn't go into a market unless we are comfortable that we can deliver the same food safety standards that we deliver around the world.

④ They actually trust us that it's so much safer to eat at a KFC in Ghana.

●当事者であるガーナ人は、KFC は、食べ物というよりもむしろ、社会的ステータスである、という。

① To many, weight gain is an acceptable side effect of a shift from hunger to joyful consumption.

② KFC isn't just food. It's social status.

③ You become addict to the spices.

④They don't force us to eat here. But it's as if we've become mentally enslaved.

ここで問題とすべきは、ガーナにおいて obesity（肥満）の危険を無視する KFC の商業主義でもなく、でっ腹（girth）が歓迎される伝統でもない。むしろ、そのような兆候について、*“They don't force us to eat here. But it's as if we've become mentally enslaved.”* というガーナ人の自覚（のなさ）である。授業課題としては、「世界資本が obese（肥満）や diabetes（糖尿病）により、ガーナ人の生命を脅かしているというのに、ガーナのナショナリズムはいったいどこへ消えてしまったのか」とか、「体に悪いと知りながら、その悪の連鎖を断ち切ることができない人々にどんなアドバイスができるのか」となる。このような問いは、メキシコについても、コロンビアについてもあてはまるもので、世界社会の視点は、さらに先鋭化していくと言いたいところだが、現実の授業展開では、かならずしもそうはならない、と告白しなければならない。

6. 権力

「社会学」においても「社会」においても、このトピックがもっとも光を放っていることは、疑いようがない。隣接の社会科学においてもそうだが、「社会」においては、社会思想のひとつとして、権力を扱うことに多くの力がそそがれてきた。いまここでは、フーコーの「自発的従属」という指摘を受けて、この矛盾した概念を学生たちに投げかけることにしている。使うのは、「二つの教室」という絵である。A 教室は、教師が存在するもので、B 教室は、教師不在のものである。これを同時に見た学生はつぎのような気づきを残す。ただし、●印のものは、藤田弘夫ほか『権力から読みとく現代人の社会学・入門』（有斐閣 1996）からの引用である。

課題：二つの教室を比較しなさい。

【教師が存在する A 教室】	【教師が存在しない B 教室】
強制、絶対的存在、怠慢、現代の教育、監視の目をかいくぐって	教師不要、学習意欲、主体的、自主的、必死、自習、監視、先生は後ろ、未来の教育 監視の目がない
学級崩壊／カリスマ性のある人間が居ない	統制がとれている／リーダーシップがとれる人が中に
相談／おしゃべり／不真面目	楽しくなさそう
宗教感がある	学校っぽい
「やるな」といわれると余計にやりたくなってしまう／権力に抗う行動を	上からの見えない力によって統制／教える人がいなくても勉強する
監視をする人→おしゃべり	監視をする人がいない→真剣に／勉強は自主的に

先生の権力は小さい／先生が甘い／自由放任	先生に従属／先生が怖い
成績が悪い生徒たち、活気、よそごと、やる気なし、自分の責任で生きている	優秀な学生たち、教師がいないのに真面目…「普通」に考えてみれば逆なのに
<p>●前近代の権力：絶対的権力者が眼前に厳然と立ち現れている。</p> <p>●こわ面（もて）の監督がにらみを利かせて自習している学生たちを見張っている。</p> <p>●先生の視線を気にしながらも教科書などをついたてにして…監督の目を盗んで楽しめる<u>遊戯空間</u>が。</p> <p>●権力者が超然的に見られることによって成立。</p> <p>●抵抗の方法はある。</p>	<p>●近代以降の権力：権力者としての監督の姿が学生たちから隠されることによって成立している。</p> <p>●自習している学生たちの背後で誰かが監督している（らしい）。</p> <p>●監督存在も確かめられぬまま、監督の視線を不断に気にするように。→内面化。</p> <p>●対象者＝民衆を細部にわたって見られる存在に徹底させる。</p> <p>●権力にたいして<u>自発的従属</u></p> <p>●抵抗の方法はなし。</p>

はじめは、通常の授業にはない視覚教材に面食らう学生もいるが、時間がたつと徐々に、絵の見方を進化させる者もいる。たとえば、A教室についての「宗教感がある」とか「「やるな」といわれると余計にやりたくなってしまう」という記述には、いったいどこからこのような発想をえたのかと、こちらがびっくりするような観察力がみられる。B教室についても、「教師がいないのに真面目…「普通」に考えてみれば逆なのに」という記述は、現代的権力のありようを鋭く見抜いている学生の思考といえる。こうして、学生たちは、自由であるはずの「自発性」という言葉が、なにひとつ矛盾することなく、服従という言葉と直結していることの不思議を感じはじめる。あとはもう、こちらは、何もしなくてもよい。その思考の延伸を、ただ見守っていればよい。

7. 人権・差別・攻撃

これらの社会問題は、学生個人に直接ふりかかってくることなので、「社会」のもっとも得意とする分野といえなくもない。がしかし、あまりにも身近な話題であることから、逆に、敬遠されがちであることも事実だ。そこで登場するのが、これまでの論調とはまったくかけはなれた、ましこ・ひでのりの『アンチウイルスソフトとしての社会学—アタマとココロの健康のためにⅡ』（三元社 2020）だ。ましこ・ひでのりはいう。

他人にたいする差別行為（「男尊女子」）や攻撃的言動が、ウイルス感染であるからには、それは個人の思想・信条・人間性といった近代的な価値観（民主主義、自由主義、

主体性、進歩…」とは、まったくかわりなく発症（医学的、機械的、道具的、動物的）してしまう。

差別を、人間の行動特性ではなく、いわば、ウイルス感染のひとつとみるもので、「社会」や「社会学」は、それへの「ワクチン開発」を目指すべきだ、という。そして、「感染したウイルスを発症させずに…一生を安穩にすごせる手法として、社会学周辺の知的蓄積を」と主張する。つまり、「社会」の実践を、ワクチン開発と見なすことで、ともすると、政治的立場とか主義主張に揺れ動き、現実の問題から乖離しがちな学界をこえて、誰もが納得できる「ワクチン」を見つけることを最優先すべきだというのだ。

ましこ・ひでのりが見つけた社会的ウイルスは、おおきくわけて、「他害系ウイルス群」と「自損他害系ウイルス群」の二種類だ。前者は、レイシズム系—コロニアリズム系—アンチ思想的多様性系—階級差別—調教系—保身—謝罪拒否系—厚顔無恥—忘却—マッドサイエンティスト系で、後者は、独善の潔癖症系—拝金—自業自得論—同化—いじり—男尊系—アンチエイジング系—節約追求—ネグレクト系である。たとえば、「オトナ（成熟）は未成年者（未熟）」をしつける権限があるという、支配の合理化」という検証がある。ここにからんでくるウイルスは、ひとつではない。レイシズム系やコロニアリズム系はないとしても、調教系や保身、謝罪拒否系や厚顔無恥といったものがありそうだし、拝金や同化はないとしても、いじりや男尊系はありそう。ネグレクト系はいうまでもない。つまり、ひとつの社会問題が、いくつもの視点から解きほぐすることができる、いや、いくつもの視点をからめつつ考察する姿勢がないと全容が把握できないという事実の指摘が、ここでは、大切であるということだろう。

8. 自己啓発

産業化でスタートした「社会」は、いよいよ、ひとごとではない、自分形成という核心に迫ってきた。牧野智和は、これまでの啓発書や最近のそれをながめ、そこに、ともすると、社会の責任を不問にする、「心理主義」および「権威主義」を嗅ぎ取っている。牧野智和[1980-]『自己啓発の時代』（勁草書房 2012）から、「自己啓発書ベストセラーの戦後史」の一部を引用する。①から⑨までは、おなじみの顔ぶれであり、一般教養書としても扱えよう。

- ① 1872：福沢諭吉『学問のすゝめ』
- ② 1941：三木清『人生論ノート—幸福は人格である』
- ③ 1963：松下幸之助『物の見方考え方—自分の適性は』
- ④ 1965：亀井勝一郎『人間の心得』
- ⑤ 1967：三島由紀夫『葉隠入門—武士道は生きている』
- ⑥ 1976：渡部昇一『知的生活の方法』
- ⑦ 1992：河合隼雄『こころの処方箋』

-
- ⑧ 1995：永六輔『大往生』
 - ⑨ 1995：春山茂雄『脳内革命（心理主義）』
 - ⑩ 2003：ジェームズ・アレン [1902 = 2003]『「原因」と「結果」の法則』
 - ⑪ 2005：江原啓之『人はなぜ生まれ、いかに生きるのか』
 - ⑫ 2008：茂木健一郎『脳を活かす勉強法—奇跡の「強化合宿」』
 - ⑬ 2009：勝間和代『断る力』
 - ⑭ 2009：香山リカ『しがみつかない生き方—「ふつうの幸せ」を手に入れる10のルール』

⑩は、あまり知られていない人なので注釈が必要となるが、ここでいう「心理主義」がもっとも端的にあらわれている。こんな感じである

——心の中の思いが 私たちを創っている 私たちは 自分の思いによって創り上げられている 私たちの心が邪悪な思いで満ちているとき 私たちには いつも痛みがつきまとう…もし私たちが清い思いばかりをめぐらしたなら私たちには喜びばかりがつきまとう あなたの環境は、あなた自身の心を映す万華鏡です。その鏡の中で刻一刻と変化する多様な色彩のコンビネーションは、動くことをやめないあなたの思いの数々が、絶妙に投影されたものにほかならないのです——

なんとも詩的な言語であり、感受性の強い人なら、思わず陶醉してしまうかもしれない。

⑪は、「磨き砂」や「自分磨き」といった言葉を一部の人に浸透させたもので、つぎのようになる。

——人生とは魂を磨く旅である。その旅の中で他者へ感謝し、見返りを求めない全てへの愛を身につけていくことで魂がより高い次元へと進むことができる…人生において出会う家族、友人、恋愛、結婚、そして苦手な人までの全てのひとが魂の「磨き砂」である。分析しない人間、奥深い思考ができない人間は、輝く人生を得られません——。

牧野智和によれば、これらの主張には、「強い心理主義」があり、あらゆる出来事についての万能な解釈、つまり、ロジックをあたえることで、結果として複雑な社会・世界を単純化してしまう、という批判なのである。しかも、「ざらざらした砂（毒）だけど、いや、そうであればあるほど、接することで自分が磨かれる（薬）、という主張・論理」には、「この世界全体を一つの原理のもとに単純化してくれるようなメッセージと、それを断定的に与えてくれる権威へのニーズが」みてとれる、ようだ。

このような自己啓発の潮流は、当然、企業社会へも浸入する。かくて、「就職用自己分析マニュアル」の登場である。あるビジネス誌のテーマを探ってみた牧野智和は、「自己の適性を知る 1954」、「自己PRの方法 1985」、「自分への作業課題（自己のテクノロジー：自分を鍛える機械的な方法）1990」、「本当に自分がやりたいのは何か」という「自分探し」1996」をみて、「自己分析を行わない理由が見つけれないほどに、自己分析の目的・必要性が語られ、自己分析からの逃げ道が塞がれていくような言説」と結論付ける。さらに、樋口裕一「天下無敵の自己PR/志望動機」1997については、「職試験を勝ち抜くには、「あり

のままのあなた」を伝えることではなく、「輝きのあるあなた」を伝える、「自己演出」が必要なだと明言している（細田恵子においては、「エピソード化」とされる）。このように就活の世界をみてきた牧野智和の結論は、こうである。

自己への微細なまなざしそのものが、新規大卒採用市場の状況認識や、採用プロセスと結びつくその契機にこそ、社会問題を個人化する最もミクロな駆動因があるということ、また今日における統治（支配・権力）の実践——すなわち、行為者個々人による自助的な調整を促し、またその責任を個々人に引き受けさせるような社会問題の処理形式——が駆動する可能性があるということを私たちは認識しなければならない。

本来、社会問題であるはずなのに、自己啓発本の多くは、それを個人の問題とすり替えている、というのだ。もしそうなら、「社会」の役目は、そのような事実を認識したうえで、それにのせられることなく、その背後にある社会のメカニズムを指摘すればよい、となろう。

9. おわりに

「社会」で扱う項目としては、ほかにもいろいろあろうが、ここでは、さいきん気になってきた、「物語り」について述べておきたい。これは、前稿^(注1)でも詳述したが、筆者としては、ライフ・ヒストリー研究が母体となり、その延長として生まれてきたもので、はじめからこういうジャンルがあると意識したわけではない。これを講義として扱うのはちょっと無理だが、実習を交えた授業としてなら意味があるだろうと考えてきたものだ。ここでは、「みどりの選択」^(注2)という作品を読みなおしつつ、その広がりとお行きに迫ってみたい。

この物語りでは、障害が残るかもしれないと言われたある男性と付き合っていたパートナー「みどり」（仮名）が、それを理由に、その人から立ち去る決断をする。ところが、そのそばで、それにもかかわらず、その人を受け入れたいという「ゆうこ」（仮名）がいたという実話が、障害が残るかもしれない人の近親者の、あたたかい口調で、紹介される。障害者差別を一般論として語るのではなく、人生選択にまで迫る課題のひとつとして受け入れることのむつかしさを、そのストーリーを読むことで理解できてしまう、という実践である。もちろん、このような聞き取りを「社会」の実習として課することはできないかもしれないが、その結果を、教材とすることはできるだろう。

みどりの選択

一番体の弱いって言った弟、ありましたね。その弟が大学を出まして、しばらく働いた時に、突然、倒れたんです……車に乗ろうと思ったら、そのまま倒れちゃったっ

ていう知らせを受けたんですね……。でまあ、ある病院に入院したんですけど、行った時には本当にびっくりして、あれよあれよと言ってる間に、足がもう二倍から三倍にふくれあがって、紫色の濃い斑点が、足にばんばんとできましてね。倒れてしまったんです……一時は、助からないだろうって、そう思って。

その時に、弟とつきあった方がいるんです。やはり、両下肢を切断するかもしれないっていうのを聞いて、まあ、離れていきまして……。でもそれは、仕方のないことです。私であっても、そうかも知れないし、その人を、どうこう言うことはこれはできない。ただ、だから、弟はもう、心の糧も何もかも失ってしまって、とにかく、「ほんとに、死にたいっていう、そういう気になった」って、あとから言っていました。

まあその、つきあってたガールフレンドっていうか、彼女、その方とは縁がなかったんです。それは、私が何となく、言葉で伝えようとしたんですが……。分かっているからって、知っているようなことを言ったんです。その時に、私、ほんとに——何て言うかなあ——いまでもよく分からないんですが……そういうお嬢さんがいて下さったっていうことが、不思議な一つなんです。看護学生として、弟の部屋にも来ていた方がね、弟が、脚を切断するかもしれないって言われた時に、それでもいい、と言ってくださったんです。その人が、いまの弟のお嫁さんなんです。奥さんなんですけど……。ずっといいと思ってたけども、つきあってる方がいらっしゃるようだったから、黙って見てきたんで……って言ってくれたんですが。

さて今年は、どんなレッスン・プランにしようか。

(注1) 横家純一「物語りのお話し」『言語と表現—研究論集—』第18号、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部、2021年。

(注2) 北川照子(語り手)、児島亜紀子・近藤弘子(聞き手)「明日への飛翔」、田口純一編『ライフ・ヒストリー研究3——プラスのストローク』椋山女学園大学横家研究室、1992年。